

地ア地研たより

2018年8月15日

No. 45

発行者 有村宏紀

文責 黒瀧善和

2018夏季現地探査会

山脈にみるシュブン

—夕張古道を探して—

2018年度の夏季探査会は、夕張川筋のアイヌ語地名と明治開拓期の岩見沢付近の様子をテーマに実施しました。開拓期の様子は、辻村もと子さんの著作に詳しく掲載されており、その内容を元に当会顧問の水本康博さんが解説しました。

今は廃線となり、通過駅としてひっそりとたたずむ志文駅です。当時は、夕張や万字で炭鉱が開削され、それに伴う物資や人員の移動・輸送のため道路の整備とともに鉄道が敷設されました。万字線の分岐や貨物の郵送のため広い構内であったことが説明され、万字線と夕張道路の交差点で下車し、当時の様子の説明を聞きました。遠くに樺戸連峰が見え、視点を変えると夕張岳・芦別岳を望むことができます。



旧万字線 軌道跡 廃線後耕地になったところもあるが部分的に残っている所もある。

辻村もと子さんは、「馬追原野」で第1回樋口一葉文学賞を受賞した作家(1944年)です。「馬追原野」は、明治開拓期の様子をテーマにしており、この頃の様子を調べるのに不可欠な資料となっています。今回、未発表の原稿が発見され、「山脈」として発刊されました。「山脈」は昭和初期の様子が描かれ、このあたりがどのようになっていったか、その作品から読み取ることができます。写真下は北海灌漑溝です。空知を縦断している石狩川は北海道で最大の河川ですが、平野部を流れており、

その名が示すように蛇行の激しい河川です。そのため、流域は湿地が広がり水害も多く、開拓を進めるためには、その対策が重要で、泥炭地の改良とともに、農業用水の確保が必要で、大正末期から昭和初期にかけ、

当時の水害の様子



水路の整備が進められました。この水路は赤平から南幌までの80kmにも及び日本一の長さで、現在も使われています。この水路は、「山脈」にも登場し、歴史を証言する建造物となっています。



夕張川筋のアイヌ語地名

夕張古道・アイヌ道を探査した後、夕張市内のアイヌ語地名の説明を受け、滝ノ上へ。



松浦武四郎の足跡をたどる

今年は「北海道命名 150 年」として松浦武四郎が注目されています。武四郎は夕張川も訪れており、東西蝦夷山川地理取調圖に地名が記されています。写真左はオソウシ川尻に滝のあるところ(川)です。地名が示すとおり、夕張川との合流部に滝があります。武四郎は、千鳥が滝で船の通行を阻まれ、徒歩でこのあたりまで来たようです。この先はアイヌの伝聞を元に地名を記したり、スケッチを残しましたが、(←)地名の順序

や場所が曖昧で、現在の地名や明治の地形図などと照らし合わせながら、川を同定する必要があります。スケッチは千鳥が滝と思われませんが、夕張岳が描かれており、実際にはここから見えない

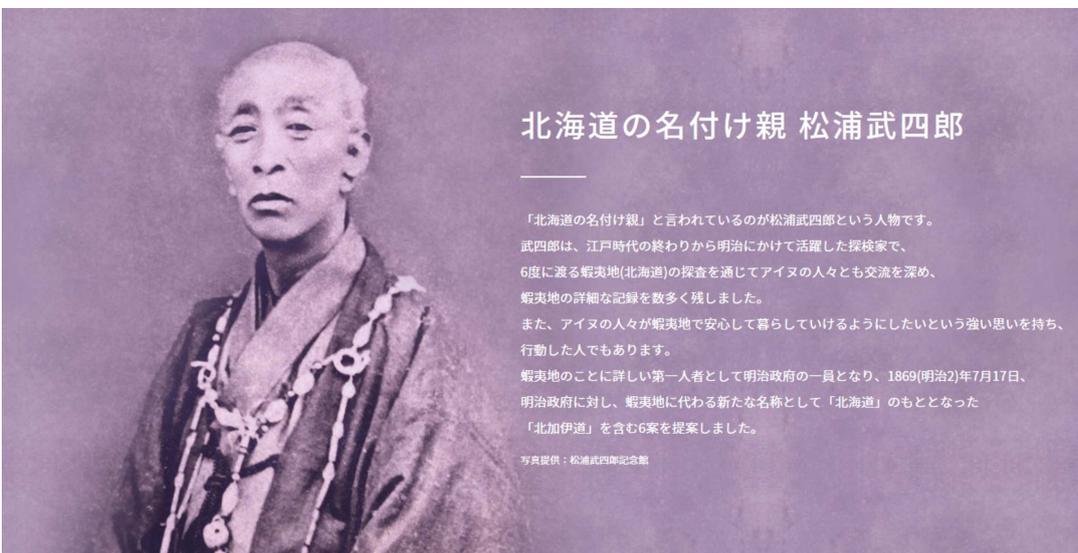


栗山町史(市本表紙)

ことから、想像で描かれたものと推測されます。探査は、千鳥が滝のチャシ跡付近まで散策し、由仁町岩内の岩内遺跡を見学し、郷土科学館へ戻りました。



夕張川には 5 カ所の発電施設が設けられ稼働しています。写真上は 1925 年北炭が建設した



北海道の名付け親 松浦武四郎

「北海道の名付け親」と言われているのが松浦武四郎という人物です。武四郎は、江戸時代の終わりから明治にかけて活躍した探検家で、6度に渡る蝦夷地(北海道)の探査を通じてアイヌの人々とも交流を深め、蝦夷地の詳細な記録を数多く残しました。また、アイヌの人々が蝦夷地で安心して暮らしていけるようにしたいという強い思いを持ち、行動した人でもあります。蝦夷地のことに詳しい第一人者として明治政府の一員となり、1869(明治2)年7月17日、明治政府に対し、蝦夷地に代わる新たな名称として「北海道」のもととなった「北加伊道」を含む6案を提案しました。

写真提供：松浦武四郎記念館

炭鉱用の発電所。1994 年道に譲渡され、改修されました。現在、発電は旧建屋左横の施設で行っています。